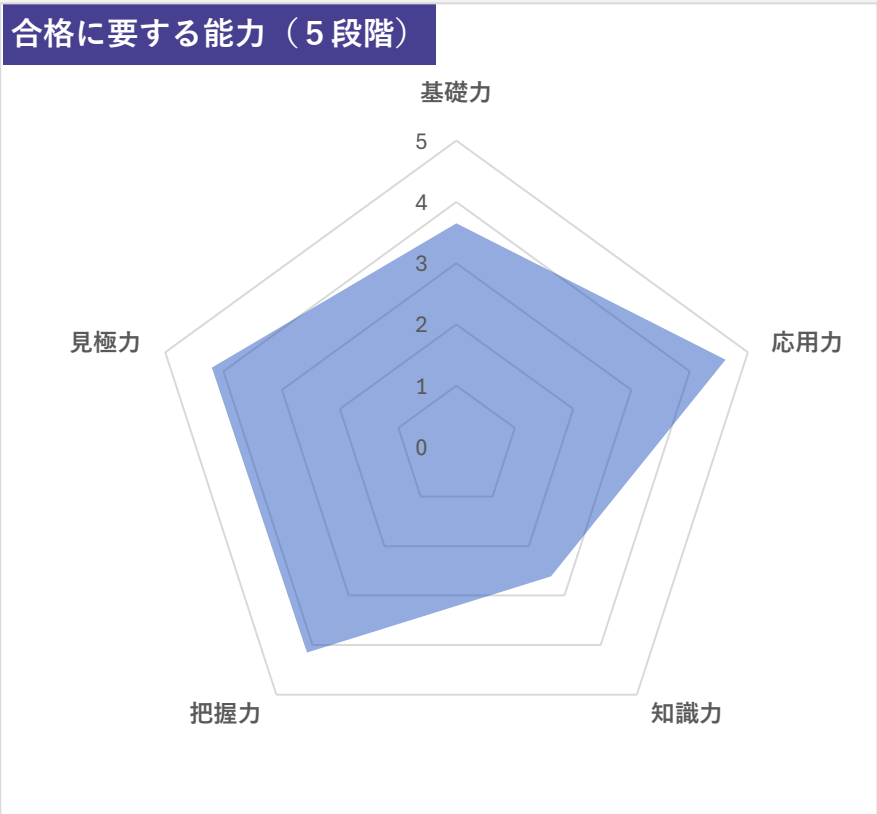


総合分析

試験区分	一般
------	----

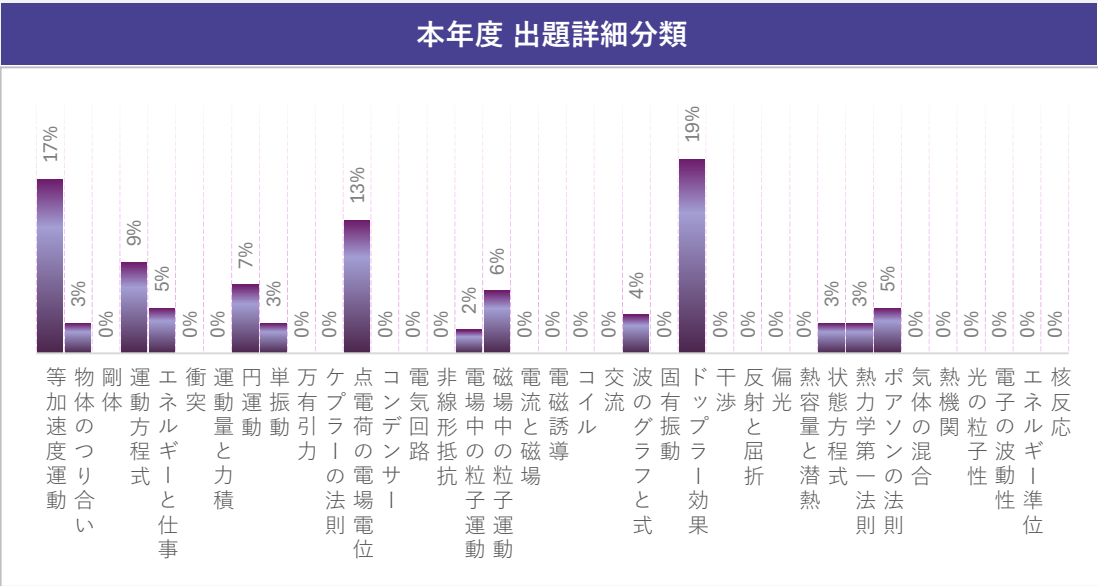
制限時間	60分 (理科 2 科120分)	大問数	全 6 問
------	------------------	-----	-------



合格に要する能力（5段階）		
基礎力	3.5	原理についての理解
応用力	4.4	演習経験による慣れ
知識力	2.4	用語を正確に覚えているか
把握力	4.0	臨機応変に状況を把握する力
見極力	4.0	解きやすい問題を選択する力

特記事項	特になし
------	------

出題分野		本年度出題テーマ一覧	
力学	44%	第 1 問	加速する台上での斜方投射
電磁気学	22%	第 2 問	斜面上の円運動
波動	23%	第 3 問	導体球の電場と電位
熱力学	11%	第 4 問	磁場中の荷電粒子の円運動
原子物理	0%	第 5 問	ドップラー効果と時間
本年度 解答形式		第 6 問	断熱ピストン単振動
選択肢 100%			



特殊問題の有無	近似計算あり	グラフなし
正誤問題なし	理由記述なし	数値計算なし

総合評価				
難度	3.7	最難を 5 とする問題自体の難度	やや難しい	一次合格に必要な正答率（予想） 64%
分量	76分	完答に要する時間（制限時間は60分）	多い	標準

入試の特徴と対策	▶ 設問ごとにテーマが一貫しており、目標に向かう流れがある。速やかなテーマの把握が鍵となる。 ▶ 概ね法則の運用に関する応用的な出題である。物理計算への慣れが必要となる。 ▶ 同時に複数の事柄への理解を要する出題が多い。独力で解法を組み立てる力を要する。
入試から見る大学が求める学生像	一つの小問の中で「自ら文字をおいて計算する」「複数の式を組み立てて連立する」という独力で梯子をかけてのぼるような作業を含んでいる。かなり完成された入試物理の研究成果が求められている。新視点の問題はほとんどなく、テーマのオリジナリティは低いが、問いの作りがストレートではない。玄人志向にひねってある。総じて受験勉強を他より長く重ねた受験生に有利である。